

2度と戦争をくり返さない!!!

長崎原水禁世界大会



高校生アピール

被爆71周年原水爆禁止世界大会が8月7日～9日、長崎市ブリックホール・大ホールでひらかれ、約1800人が参加し、和歌山から9人が参加した。

開会総会のオープニングは、被爆者歌う会「ひまわり」から戦争反対の歌が披露され、黙とうをささげた。松田圭治・長崎大会実行委員長のあいさつ、川野浩一・大会実行委員長の主催者あいさつ、エカテリーナ・ヴィコワ「ラディミチ」チェルノブイリ情報センターの海外ゲストあいさつにつづき、藤本泰成・原水禁事務局長の大会基調の提案があった。瓶子高裕・福島県平和フォーラム事務局次長から、福島原発事故の補償が打ち切れ、一方的な帰還強行に無責任な政府の現状が報告された。長崎からのメッセージとして、

田上富久・長崎市長、爆心地から7・11キロで原爆にあいながら、国の基準からはずれ、被爆者と認められない全国被爆体験者協議会の参加者、第19代高校生平和大使と高校生1万人署名活動実行委員会の100人あまりが登壇し、国連欧州本部訪問の抱負や運動を継承することの決意表明がなされた。最後に「原爆をゆるすまじ」を全員で合唱し総会をおえた。

2日目の分科会「子どもへの平和のひろば」では、原爆が投下され、母うまと生き別れた子うまの物語「ながさきの子うま」が上映された。つぎに、城臺美弥子さんの被爆体験談では、6歳で被爆したこと、大豆の

カスやかぼちゃのツルがおやつだったこと、食べることで遊ぶこと、伝えることが真の平和だと力強く語った。



語り部から体験を聞く子どもたち

路面電車からみる被災地

被災地

分科会にひきつづき、先方によるフィールドワークでは、長崎駅から路面電車で松山町にある爆心地公園に移動した。車窓から原爆投下直後、臨時の救護テントがはられた西坂公園や福岡捕虜収容所、三菱兵器製作所幸町工場、今も残る防空壕、衝撃波でよじれた山王神社の二の鳥居の説明をうけた。爆心地公園上空では、B29から投下された原子爆弾が500m上空で大きく裂き、1帯が4千℃以上にもなり、強烈な熱線と放射線を破壊し、焼きつくした。また、三角柱になっている中心碑は、木や建物の燃え方を計測し、中心をわりだしている。また、中心碑に

最終日は、長崎県立総合体育館でひらかれ、長崎から沖繩へタスキの返還がなされた。沖繩、原爆再稼働反対、高校生の各アピールのち、藤本原水禁事務局長から「かけがいのない命」「命は何よりも大切」という言葉にうなづきながら、ふとした違和感を覚える。路上にまで追いやられた人を見る視線は優しいとはいえない」という雨宮処凛さんの言葉を引用し「原爆震災」「憲法と沖繩」「再処理」「ヒバクシャ」などの分科会でなされた議論に共通するのはすべて「命」の問題。「核絶対否定」の考え方を基本に、各兵器廃



和歌山からの参加者



原爆投下中心部で黙とう

絶・脱原発へのとりくみを確認し、爆心地公園までを非核平和行進した。

- ◆メインスローガン
 - 核も戦争もない平和な21世紀に!
 - くり返すな原爆震災!めざそう!脱原発社会!
 - ◆サブスローガン
 - 子どもたちに核のない未来を!
 - 安心して暮らせる福島を取り戻そう!
 - 子どもたちを放射能から守ろう!
 - 許すな!再稼働 止めよう!
 - 再処理・もんじゅ めざそう!脱原発社会
 - エネルギー政策転換!
 - 持続可能なエネルギー利用を増やそう!
 - 憲法改悪反対!辺野古に基地をつくらせるな!
 - 非核三原則の法制化を!東北アジアに平和と非核地帯を!
 - 核兵器廃絶へ!核兵器禁止条約をつくらう
 - 再びヒバクシャをつくるな!
 - 全てのヒバクシャの権利拡大を!
 - 安倍政権の暴走を許さない!平和と人権を守ろう!

載(1) 後年 連(1) 没50年

解放の父 松本治一郎を偲んで

本年11月22日に没後50年を迎える解放の父・松本治一郎の部落解放に捧げた生涯とその人となりを偲んで記事を連載する。

松本治一郎は、1887年、明治20年6月18日に、現在の福岡市で生まれた。治一郎の79年の生涯は、まさに「荊の道であり、不撓不屈の生きざまの中にもユーモアに富み慈愛に満ちた一生だった」と「西日本人物誌・松本治一郎」に記されている。

治一郎の座右の銘は「不可侵、不可被侵」である。被差別者でありながら、みずからが決して他の人を侵さず、自分自身も侵されることのないという決意が込められたものだ。

また、数多くの逸話が残されているが、なかでも「カニの横ばい事件」が有名である。戦前戦後をつうじて衆議院議員、参議院議員を務めているが、戦後初の参議院副議長に就任した時、両院議長、副議長が天皇にあいさつをすることになった。旧来の慣行によるそのときのようすが、まるでカニがモーニングを着て横ば

常に対大衆・生活者のなかに入りつづけ、反差別・反権力を貫き、不退転の決意で闘いの先頭に立ってきた松本治一郎を「おやじ」と呼び「解放の父」と称せられている。

(次号につづく)